星のアイヌ王子さま

Alessandro G. Gerevini

先日『pomociwkorkur』と題するきれいな書籍を購入した。どういう本かというと、あの有名な『星の王子さま』の超貴重なアイヌ語訳（アイヌ・イタク）である。「訳者ノート」によれば、井筒勝信と小坂洋右という二人の日本人による初のアイヌ語訳である。しかしアイヌ語なのに、そして日本の研究者が担当した翻訳なのに、日本ではなくEdition Tintefaßというドイツの出版社から出版されている。

この複雑な事情を少し整理すると、アントワーヌ・ド・サン=テグジュペリというフランス人作家がフランス語で作成した『星の王子さま』は、二人の日本人研究者によりアイヌ語に訳されたのに、ドイツの出版社から発行された後、偶然にもイタリア出身の一読者である私の手に入った。ダイバーシティを限りなく好む私にとっては、この上ない喜びを感じさせてくれる一冊である。

しかしよく考えると、なぜドイツの出版社は『星の王子さま』のアイヌ語訳なんかを出版したのか、という疑問が湧いたので、ネットで検索した。その結果、Edition Tintefaßはネッカーシュタイナハという、４千人にも達しない人口の小さな町にある、家族経営の出版社でありながら、『星の王子さま』の１７０カ国語を超える言語と方言の翻訳版を出していることが判明した。その果てしなく長いリストを見ると、古代エジプトのヒエログリフ、モールス符号、セネガルのウォロフ語、イタリアのミラノ弁、トンガ語、サンスクリット語、マヤのユカテコ語、韓国の慶尚道弁などの吃驚仰天の翻訳ばかりである。常識に考えれば、ドイツにはそういう、極めてマイナーな言語の専門家はそれほどいないはずなので、国内の言語学者以外の顧客をターゲットにしているはずだ。さらに調べると、実際、財団や個人から寄付金を集めることもあり、世界中に散らばっている『星の王子さま』の絶対的なファンを中心に「一風変わった」書籍を発売していることもわかった。というのも『星の王子さま』を愛読するコミュニティの中で不思議な現象が起こり、それぞれの翻訳版の言葉や方言が理解できようができまいが、各国のエディションを集めている熱心なコレクターが多いそうだ。従ってそういう顧客のニーズに応えるような形でEdition Tintefaßがマニアックだと言っても過言ではない書籍を出版している。

しかし『星の王子さま』の世界では、ドイツのこの小さな出版社の活動は氷山の一角でしかない。よく知られている事実だが、『星の王子さま』は『聖書』の次に一番多くの言語と方言に訳されている本である。スイスのJean-Marc Probst pour le Petit Prince財団の公式サイトによれば、２０２３年1月現在で５２７カ国語という驚くべき数にも達している。そして当財団で保管されているバージョンは６５３２冊にのぼっているので、多くの国では何回も翻訳され、発行されていることが窺える。例えば日本だけでも１９５３年に内藤濯が手掛けた初めての日本語訳から現在までおよそ26の異なった翻訳版が出回っている。更に２０２１年

に東京外国語大学出版より、ウズベク語、カンボジア語、チェコ語などを含む『28言語で読む「星の王子さま」』という世界初のスーパー・マルチランゲージ版も出版されている。

言うまでもないが、それぞれの国のマーケットが求めている書籍の場合、その必要性は誰にでも容易に理解できるが、活字文化はあまりなく、出版物の流通は全く機能しない国の言語、あるいはほとんど使われなくなった言葉の場合、誰のために次々と訳されるのかと不思議に思う人もいるだろう。

この疑問を深めるように一つのエピソードがある。昔、イタリアの雑誌の取材でアフガニスタンの首都・カブールを訪れた際、町の書店に足を運んだ。そしてお店の一角に馴染みのある表紙の本を見つけ、店員に聞いてみたら、『星の王子さま』のダリ語訳だと言われたので、異国にもかかわらず知っている本があるという嬉しさ故に衝動的に購入した。そして数年後に偶然にもその出版の企画を手助けしたスペイン人女性の友人と知合った。「私はその本をカブールの本屋さんで買ったんですよ」と誇らしげに伝えると、暗い顔をされてしまった。その人の説明によれば、『星の王子さま』のダリ語訳は個人の援助金のおかげで出版された書籍なので、書店に並ばないはずの非売品だったという。本が発行された際、スペイン人の慈善家がアフガニスタンへ出向き、現地の学校を回りながら多くの子供たちに無料で提供したとも言った。「書店で売られていることは彼女のミッションが失敗に終わったという証拠ですよ」という悲しい一言で話を終えた。つまり、何が起こったかというと、珍しい本をタダで渡された貧しい子供たちはそれを読むことなく、町の書店に売り込み、その僅かなお金は生活費として使ってしまっていたそうだった。もちろん一部の子供たちは小説を読んだかもしれないが、ほとんどの場合はそうではなかったようだ……。

この話から学べることはいろいろある。昔から読書文化のある国の考え方やアプローチを通して、それがほとんど存在しない国に、たとえ無料で素晴らしい文学作品を提供してあげても効果はほとんど見られない。つまりそれぞれの国の人たち、あるいはそれぞれの言語を話す人たちが自ら読みたいという気持ちはない限り、本は必ずしも必要とされないリスクがある。

当然ながら冒頭で振れたアイヌ語訳は状況が完全に違うけれど、誰のための本なのかという疑問が共通している。よその国で発行されたので、日本の一般の書店では発売されないだろう。つまりアイヌ語話者のための本でもなければ、現地でアイヌ語を普及させる本でもないという可能性が高い。とはいえ、ユネスコによって〈極めて深刻〉なレベルで「消滅危機言語」のリストに掲載されたアイヌ語の存在感を再確認すると同時に、その文学的品位を強める効果が否定できないだろう。

『星の王子さま』が大好きな私にとって、世界中で次々と現れる新たな翻訳版は非常に喜ばしいことだ。しかし先進国から来た慈善家の自己満足、言語学者や翻訳家の自らの知名度を高めるための手段、あるいはコレクターの欲望を満たすための貴重品としても作られていることを思うと、悲しい気持ちを抱かずにいられない。

よく考えると私には人のことはあまり言えないかもしれない。長年にわたって翻訳と携わってきたので、新型コロナウイルスのパンデミックが始まった時、暇つぶしに『星の王子さま』を、私の「心の母語」であるクレモナ弁に訳し始めたからだ。がしかし、皮肉なことに話し言葉として毎日スムーズに話せているにもかかわらず、書き言葉として使うとなると、状況が完全に異なる。特殊な記号、複数のアクセント、長母音、短母音……PCのキーボードで非常に打ちづらいので、第一章で諦めてしまった。続きは、新たなパンデミックが起こらない限り、老後の楽しみにしておこうと決めたが、私もやはり、少し格好をつけて、ドイツの出版社から出してもらうという夢を見ている。